

地域の誇りを展示できる幸運—福岡県東峰村の例—

黒 木 貴 一

余暇活動や学会などの出張の合間に博物館・資料館を訪問して、地域の歴史、資源、自然などを知り楽しむ機会は多い。そのような施設訪問時には、必ずパンフレットを頂戴し、特に印象深い時には図録を購入して後日楽しむに止まらず、その内容を講義などの授業にフィードバックすることを心掛ける。手元に残るそれらパンフレットは、北海道・東北で33（福島県小野新町のリカちゃんキャスルなど）、東京で28（北区のお札と切手の博物館など）、東京以外の関東地方で38（茨城県小川町の納豆博物館など）、近畿で30（大阪府豊中市のインスタントラーメン発明記念館など）、中国・四国で30（島根県出雲市の宍道湖自然館ゴビウスなど）などを残しているが、眺めれば訪問時に見た展示物など場の記憶が蘇る。

それら展示物には、その年代や形状、学芸員の有無、公共か私設か、教育か企業宣伝などによって展示方法に相当の違いが見られる。ただいずれも、その地域で人々が、育み、営むことで支持されてきた文化が顕在化されたという共通性がある。つまり施設には地域に根ざして共に歩む姿が必ず垣間見えるので、その展示物は地域の誇りとも言えよう。考えてみれば、展示物は、その価値がまず認識された後に、展示可能な条件が整って初めて生きてくる。恥ずかしながら数年前までは、展示される以前の、その価値を示すまでに捧げた人々の努力や工夫、そしてその幸運に思いを馳せることは無かった。しかし2017年7月九州豪雨の災害調査後に従事した業務を通して、価値の確定までに努力、工夫、幸運があることを体感し、博物館・資料館の有難さがより心に刻み込まれた。以下、その事例を紹介する。

九州豪雨では、福岡県朝倉市東部にある東峰村で、僅か1日に800mm以上の降雨があり山地での斜面崩壊に加え低地では土石流にともなう河岸侵食が多く生じた。その侵食で河岸に露頭が生じ、そこに偶然水田の僅か2m程下位に



写真1 河岸侵食の現場状況

巨木の一部が現れた（写真1）。巨木が直径約70cmで周囲が少し焼けて黒ずんでいる。その出現状況を、土石流で運搬された流木ではなく、“尋常ではない何か”と気付いたのは、幸運にも日頃より樹木に慣れ親しむ造園業を営む水田所有者だった。その異常な巨木は当村教育委員会の知る所となり、情報は福岡県まで流れた。その頃、地質学者の知人が概査を進め、それが約9万年前の阿蘇4火砕流の直撃を受けた埋没樹木の可能性の高いことが分かった（図1）。既にその情報は文化庁にまで及び、補助金による学術調査が実施される運びとなった。この時期から筆者は調査に参加している。

調査は、踏査による地質確認、ドローンでの地形モデル作成、衛星データによる阿蘇から現地までの地形・植生解析、詳細なDEMによる火砕流の地形判読など、相応の時間を費やして慎重に行われた。その他、トレンチ調査や露頭資料による火山灰分析や花粉分析も実施され、9万年前の寒冷な時期に阿蘇4火砕流に直撃されそのまま埋没した樹木であることが確認された。この間、トレンチ現場の水田は休耕を強いられたが、村の文化財誕生への期待を共有いただいた所有者から、惜しめない協力を頂戴した。

図2は、ドローンで撮影した空中写真から作成したトレンチ現場の三次元モデルを示す。そしてトレンチの周囲の旗1～6がGCPを示す。



図1 東峰村と阿蘇山との位置関係
背景は地理院地図

トレンチはまず土層を確保した上で約1 m掘り、推定した樹木位置でさらに1 m掘り下げた。そこで樹木状況を観察し、さらに樹木と基盤・砂礫層との関係を確認した。

この調査は、埋没樹木と阿蘇4火砕流に止まらずその周辺環境との関係も明らかにし、埋没樹木を核とする全体の普遍的な価値を示す目的で回数を重ねた。その結果は推敲を経て修正の繰り返された図表や文章となり、複数回の校正

を経て報告書¹⁾にまとめられた。その成果は第5章の総括文、「阿蘇4火砕流堆積物と地域の人々の生活や文化には強い関連がある。自然災害の痕跡と地域文化の成り立ちや特徴を示す貴重な地域教材としても利用できる」、「露頭や埋没樹木などは、阿蘇4火砕流と拡散のプロセスを示す重要な学術資料としての価値がある」に凝縮されている。

そして文化財保護法に基づき「阿蘇4火砕流堆積物及び埋没樹木」は天然記念物に指定され、2022年3月に官報に掲載された。豪雨で甚大な被害を受けた人口僅か約2000人の東峰村に、その復旧の力となる文化財が誕生した瞬間だった。報告書ではまた、この天然記念物を中心としたフィールドミュージアムとしての教育活用を展望しているが、現在、村は保存と活用に向けた本格的な検討を開始した段階にある。近い将来、適切な手段による新文化財の展示が始まることを期待している。

自身は今、コロナ禍中の異動後2年になるが、地域の誇りを展示できる幸運を持つ、本学博物館の存在を思い、関西大学に奉職できる幸せを感じるばかりである。

【参考文献】

- 1) 東峰村教育委員会 (2021)：東峰村の阿蘇4火砕流堆積物及び埋没樹木発掘調査報告書。東峰村文化財調査報告書、第5集、58p。

関西大学文学部教授

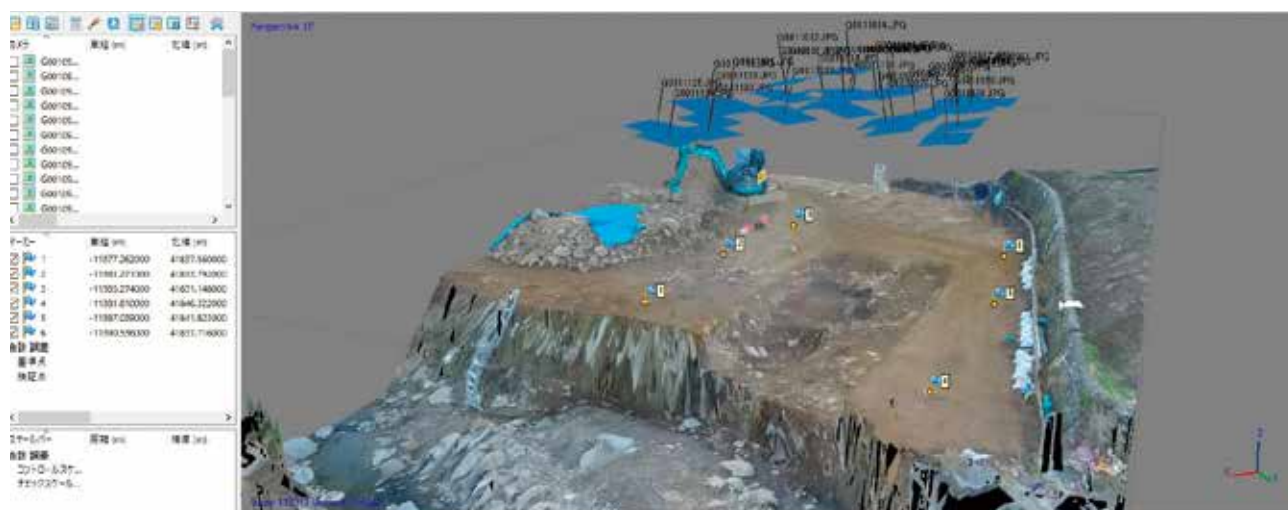


図2 トレンチ現場の3Dイメージ